

Title	離島における地域創生政策の立案
Author(s)	立石, 亮伍
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71930
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏名	たていし りょうご 立石 亮伍	学部 学科	法学部/国際公 共政策学科	学年	3年
ふりがな 共同 研究者氏名	なかの ゆうすけ 中野 裕介	学部 学科	法学部/国際公 共政策学科	学年	3年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	おおつき つねひろ 大槻 恒裕	所属	大阪大学大学院国際公共政策研究科		
研究課題名	離島における地域創生政策の立案				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
<p>1. 研究目的</p> <p>奈良県十津川村の地域おこし活動に三年間関与し、高齢化が深刻化する過疎地を維持するための活動や方策を目の当たりにして将来への緊張感を高めてきた。内陸の農山村における魅力への理解を深める内に、環境が異なる地域への興味関心が沸々と湧いてきた。そこで、一番関心が深い文化についての諸現状を離島を題材に考察すること、さらには調査を通じて得た情報を内陸のそれと比較し、相違点や類似点を明らかにしそれを十津川・隠岐の島に限らず諸地域に還元することを目的とする。</p> <p>2. 研究計画・方法</p> <p>本研究では行政および地域住民に対し、半構造インタビュー方式にて十津川・隠岐の島の文化やその継承状況などについて情報収集を行った。</p> <p>調査地域：奈良県十津川村神納川地区、島根県隠岐郡隠岐の島町</p> <p>訪問日時と訪問概要：</p> <p>第1回 11月10日～11月11日</p> <p>神納川地区の盆踊りを主催する地域住民4名と役場職員2名に神納川地区および十津川村の盆踊り文化について五百瀬集落五百瀬小学校でヒアリングを行った。ヒアリングでは、盆踊りに灯籠を導入した経緯、盆踊りが有する昨今の役割、県外住民の盆踊りへの視点についての情報を入手できた。さらにはH30年度の盆踊りの反省も行った。そして来年度で4年連続となる盆踊りの構想や意気込みから定量化できない熱量を観測することもできた。</p> <p>第2回 11月22日～11月24日</p> <p>隠岐の島町西郷・五箇の諸地域にて、地域のハブとなる喫茶店やゲストハウス、役場の観光振興課や五箇地域での直会を通じて隠岐の島の文化である牛突き・祭事・古典相撲・神社について後継者問題や存続状況等のヒアリングを行い、期間中に開催されていた行政の祭や五箇地域の神社の新嘗祭に参加し、得た知識と経験を擦り合わせることもできた。</p>					

3. 研究結果・考察・成果

計2回の訪問調査で得られた内容に基づいて、報告書としてまとめた。

研究結果として、第一に奈良県十津川村における文化の盆踊り・駅伝・道/水普請についてその性格をまとめる。第二に隠岐の島についても牛突き・祭事・古典相撲・神社について記述する。それらをまとめる際には、違いが分かりやすいように、村内と村外の人が持つ文化の捉え方に言及する。その後考察として、両文化の性格の比較を行い、両地域に有益らしい政策を考察し、今後訪問する時に提言として提出し、それを成果とする。

3. 研究結果

十津川村における文化

【1】 盆踊り

盆の時期に村内各地で行われる。今は地区毎に開催されているが、一世代前（およそ30年前）は地区毎のさらに集落毎に開催されていた。例えば、神納川地区では現在一か所で一度行われているが、過去においては神納川地区の中の5集落全てにおいて開催されていた。この例のみを見ても、盆踊りの数が村全体においては相当数減っていることが理解できるだろう。

① 村内の人にとって

年間を通して一番地域が盛り上がる催し。踊る地域によって囃子と踊り方はまちまちで地域毎に誇りを持っている催しである。かつては人と人が出会う場であり、この催事を通して結ばれた人たちも少なくない。今年度この催事を運営した村民も皆人が集まるための場所と認識していた。戦時中には小規模になったものの、この催事を通じて知り合いの安否を確認するなどして、元気を得ていたとされる。

② 村外の人にとって

帰省する時期に行われているもの。村内に親戚がいる人に認知されている。村内に親戚を持たず盆踊りに関心を示しているのはこの催事にまつわる研究者または釣り趣味やボランティアなど盆踊り以外で十津川村と結ばれている近隣住民や近隣大学生などである。

【2】 駅伝

各年一月初旬に行われる催し。60年以上続いており、30年以上参加している住民もいる。自然を感じられ、コースも平地と比べ起伏に富んでおり走り応えがあるとして村外からの参加者も多い。H29年度の駅伝では村内チーム25、村外15と村内の盛り上がりがある一方で村外からの高い関心が寄せられているのも分かる。

① 村内の人にとって

盆踊りよりも一層地区所属意識を高める催し。編成するチームは地区内のメンバーに限られる。チーム全員が地区内の住人のため、走者以外の住民も自チームが勝利することを望み、またその雄姿を見届けるために沿道に数多く姿を見せ、その名誉と栄光に力強い鼓舞を行う。地区が一体となり催し後の結束はより固まる。また、女性メンバーや中学生も参加することができ、老若男女問わず魅力的な行事となっている。

② 村外の人にとって

一番気軽に参加できる十津川村内の催し。陸の孤島と呼ばれ、意図せずとも閉塞感を伴う十津川村において一番オープンな催し。走り好き、および十津川村を好む人たちにとって是非参加したい行事である。村内チームのトップは相当速く、村外チームもより意気込めるかたちとなっている。

【3】道/水普請

村内において道の清掃や水回りの管理を定期的に行うこと。道は神社へ通じるものもあり、格式高い取り組みでもある。水回りにおいても、十津川村では谷の水を共同で生活用水に利用している地域が多々あり、管理は村全体で行うことが必要とされている。

① 村内の人にとって

できるだけ参加する必要がある催し。普段住民同士の繋がりが強い分、共同で管理する必要のあるものごとへの関与は避け難い。各家庭、就いている仕事が楽ではない分苦勞を強いられるが、それでもなお参加すべきものである。しかしながら大変なイメージだけではない。移住者にとっては地域住民と親交を深められる機会と認め、普請は積極的に参加を望む性格も持ち合わせている。

② 村外の人にとって

およそ関与しないものである。ボランティアを行う研究者や大学生は参加することもあるが、十津川村内の親戚の有無関わらず参加は強制されない。なぜならこれは人を多く必要としない。必要なのは効率よく迅速に作業を終えることである。外部からの参加者が手間取れば住民の負担はより大きくなる。

隠岐における文化

【1】牛突き

800年近く続く催し。もとは後鳥羽天皇のために始まったが、以来島民の娯楽として根付いた。現在は年3回、大会が開催される。

① 村内の人にとって

観戦を例年楽しむもの。年に6度以上大会があるため、年中楽しめる催しとなっている。一方で飼育が大変であり、牛突きに出せる牛を飼い揃えている家は減少している。牛が少ないというよりは、飼い主不足であることが挙げられる。飼い方のノウハウがある家で代々飼育を継承されるのが主で、新規に始める家はごく僅かである。

② 村外の人にとって

観光で希望すればいつでも楽しむことができる催し。村外の人が希望すると観戦できるのが観光牛突きと呼ばれ、引き分け試合を楽しむことができる。勝負がつく牛突きを見たいと願うならば、上記で述べた6度の大会のうちのどれかに合わせて訪問する必要がある。

【2】祭事

1200年前から続く隠岐国分寺の蓮華会舞や、大山神社の大木にかづらを7回半巻き付ける布施の山祭りなど、独特の祭りが多い。

① 村内の人にとって

装束を正式に纏い、形式に則って行う祭事は住民にとっての誇り。古事記と関係が深い隠岐の島では日本全土においても独特な祭りが多く、それらの担い手に選ばれることは後世に語り継ぐほど格式高いものとされている。中には未成年が執り行う祭事もあり子供の頃から身近なものであり、地元への愛着が生まれるものである。しかしながら、憂うべきことに集落の消滅に伴う祭事の消滅や形式保全の不完全さが生む継承力不足により正しく行えない地域も増えてきている。

② 村外の人にとって

なかなか住んでいる地域では見ることのできない祭事を見られるとして貴重な体験をさせてくれる催し。また、祭事に関心がある人にとっては日本の祭事のルーツを辿ることができるものと位置づけられており、その価値は計り知れない。

【3】古典相撲

二番勝負で行われ、必ず一勝一敗とすることから人情相撲といわれる。遷宮や大規模な公共事業の完成のときにのみ開催される。

① 村内の人にとって

不定期で開催されることもあって、開催される時は爆発的な人気を呼ぶ。開催が決まれば、開催地の関係者の若手が様式などを学び準備を行う。土俵に立てるのは心身ともに健全である若者と決まっており、出場することは当人およびその家にとって大変な誇りとされる。これには外部からの移住者も参加することができ、住民に向けては開放的な催しである。

② 村外の人にとって

不定期で開催されるのでそれに向けて訪問することは少々難しい。しかしながら、格式高い古典相撲は隠岐ならではの魅力を生み、訪問した人々はみな喜んで観戦する。

【4】神社

100社以上の神社がある。昔は地域間での行き来が難しく、各集落でそれぞれ神社を作った。離島だと思えぬ立派な神社が多い。

① 村内の人にとって

地元にならずと言つていいほど存在するアイデンティティ。社の清掃などは持ち回りで行き、神事に際しては村全体を挙げて参加するほど活気を見せる。神社各々歴史が古く島民は誇りをかけて管理し大切に維持することを心掛ける。

② 村外の人にとって

御朱印巡りが趣味の人は必ず五箇地域を訪れて御朱印を貰う。そうでない人も神社がこれほどまでに密集している島は珍しいため、観光を欠かさなかった。しかしながら、観光客減に伴い神社を訪れる観光客も減っている。

4. 考察

以上の情報を以て十津川村と隠岐の文化の比較を行う。両者の類似点を以下に示す。

1) 歴史が深い

十津川村は南北朝時代から、隠岐は古事記が記される頃から神社が建立されている。

2) 催事の担い手が老若男女

十津川村は駅伝に若者が参加。盆踊りにも参加。隠岐は祭事や古典相撲に若者が参加。

3) 依然担い手不足

催事に若者が臨むと言つても、知識・技術を引き継ぐ段階に到達しない集落がある。

次に両者の相違点を以下に示す。

1) 12か月での催事の数で隠岐の方が倍以上

十津川村は盆踊り、駅伝、普請などがあるがいずれも単発であるのに対し、隠岐では牛突きや祭事などが年に複数回行われている。

2) 文化の観光利用は隠岐の方が優れている

駅伝は観光に利用できているが、十津川村の盆踊りは観光というよりは親族・住人向け。逆に隠岐は牛突きを随時観光可能にしており、観光要素を持つ駅伝対牛突きという構図で見れば一年に一度である駅伝に比べ年中観光化できている牛突きに観光効果の軍配が上がる。

類似点から十津川村と隠岐両者が導き出すべき政策は以下に示す通りである。

①歴史好事家に対象を絞って観光誘致する。例えば十津川村では十津川郷土と関わりがあった坂本龍馬の研究会や好事家たちを対象に歴史的な部分を強調して宣伝し、郷土に所縁のある土地巡りマップを示したり、遺跡をガイドを以て案内したりするのが良い。隠岐では日本の成り立ちについて興味を持っている好事家を対象に同様のことを行うのが良い。

②催事を担う若者の育成。アイデンティティの確立。例えば十津川村では駅伝や盆踊りの歴史などを綿密に教え、催事の際には帰郷し地元へ貢献するような人材を育成する。隠岐では主に祭事について正確な所作、装束を撮影・記録し、電子データとして遺す。

相違点から十津川村と隠岐両者が導き出すべき政策は以下に示す通りである。

①催事の準備期間が長い十津川村ではさらに大規模な宣伝。催事の数が多い隠岐では現状維持可能な現状維持。しかし人口減少は自然に起きていくので、維持不可能な場所は電子データで保存する。完全に失われる前に形として遺せば将来的に引き継がれないとも限らない。

②十津川村では催事を観光資源に変換する。具体的には盆踊りや駅伝の概要や魅力をポスター化や書籍、パンフレット化し、年中観光客の目に触れるようにする。隠岐では真剣勝負の牛突きの魅力のみに焦点を当てた冊子やそれに類する資料を作成し、観光牛突きの観光客に配布する。

以上の政策は地域の活性化を念頭に置いた提言である。観光化が過剰になれば環境破壊問題など別の問題が生じるのは想像に難くないが、まず外部人口、交流人口を増やさないことには催事そのものの存続が危機的状況になるのは時間の問題である。並行して村内、島内の若者への地域愛を促進させていかなければ根本的な解決に繋がらないことも理解している。これらを成就させるために私たちは報告書だけで満足してはならず、以後も当該地域へと足を運び、何度も地域住民と政策を話し合い、修正し、概ね合意した上で地域振興策を講じなければならない。さすれば過疎化・少子高齢化の地方地域も活性化するはずである。

5. 謝辞

さて、この度は大阪大学の自主研究の助成金をいただき、様々な調査をすることができた。当研究を支援いただいた大阪大学教育・学生支援部教育企画課の皆様には御礼申し上げたい。研究を遂行するに当たっては、私に調査を通じて深く十津川村や隠岐の島を知る機会を与えてくれた先輩方、そして十津川村神納川地区および隠岐の島のみなさまには心より感謝している。

6. 参考文献

1. 地球の歩き方編集室 『地球の歩き方 島旅09 隠岐 OKI』ダイヤモンド社 128pp.
2. 藻谷浩介 NHK 広島取材班 『里山資本主義』角川書店 308pp.
3. 島原万丈 HOME'S 総研 『本当に住んで幸せな街』光文社 221pp.
4. 平田オリザ 『下り坂をそろそろと下る』講談社 238pp.
5. 井下千以子 『レポート・論文作成法』慶応義塾大学出版会 156pp.